

スクリーニング：4月2日採血検体は4月6日道衛研にて受けられ（検体ナンバー AC86118），6月9日～11日，Assay No.54（総検体数452）で測定が行なわれた。採血状態は良好であった。栄研 ICL 社製クレチン TSH（PA 法）キット（ロット番号 CTSGKIDA，検定日4月13日）で測定された。標準曲線は良好で，高低両コントロール検体も正常に検出されていた。測定値のヒストグラムにも特に異常は認めなかった。平均値 5.08 ± 2.30 （S.D.） $\mu\text{U/ml}$ （全サンプルの平均）で患児の値は $6.15 \mu\text{U/ml}$ であった。3 Percentile 以上の検体は14検体でその分布は $9.82-14.54 \mu\text{U/ml}$ であった。この検体は再検され，一部は再採血を行ない調べたが，クレチン症はみとめなかった。種々の工程，操作上検体が入れ替る可能性はないと考えられる。

考案：遷延性黄疸を認めた以外特にクレチン症を思わせる所見がなく，スクリーニングの結果，大腿骨遠位端の骨核の大きさ，T-chol，GOT，GPT の所見より，少なくとも新生児期には機能低下症はなかったと考える。生後6ヶ月時の骨年齢が6ヶ月（手根骨2ヶ）であった事， T_3 が 100ng/dl 以上であったことは未治療無甲状腺性クレチン症では考えられないことと思われる。道衛研における cut off は3 Percentile 以上のものを再検査し，再度3 Percentile 以上の検体について再採血を行なっている。最近初回検査で3percentile ぎりぎりの症例が，再採血，精検と年齢が進むにつれ機能低下が顕著になった2症例を経験している。スクリーニングが行なわれ，異常なしと報告されている乳幼児でも少しでもクレチン症が疑われる症状を認めた場合，積極的に検査をする必要があると考えられた。

慢性甲状腺機能障害の疫学と予後に関する研究報告書

札幌市衛生研究所 高杉 信男
福士 勝
荒井 修
水嶋 好清
佐藤 勇次
林 英夫
北海道大学医学部小児科 松浦 信夫

1. 札幌市におけるクレチン症マス・スクリーニングの成績

1978年6月から1979年6月までに TSH 測定により24,173例，1979年7月から1981年3月までに TSH， T_4 両者測定により37,134例，1981年4月から12月までに TSH， T_4 両者測定に TBG 測定を加えて15,384例，合計76,691例のスクリーニングを行った結果，15例のクレチン症を発見した（発生頻度1/5,113）。

TSH, T₄ 両者測定で発見された10例中6例は TSH 高値, T₄ 低値を示したが, 4例は TSH 高値, T₄ 正常であり T₄ のみのスクリーニングでは見逃されていた症例であった。

2. TSH によるスクリーニングにおけるカットオフ値の比較検討

1981年4月から12月までにスクリーニングを行った15, 384例についてカットオフ値としてパーセントイルと絶対値を用いた時の再採血率と発見率を比較した。

第1回目測定のカットオフ値すべて上位3パーセントイルとした。

第2回目測定のカットオフ値が3パーセントイルでは123例(0.80%), 10 μ U/mlでは50例(0.33%), 15 μ U/mlでは8例(0.05%)が再採血および精査の対象となった。

第2回目測定のカットオフ値を3パーセントイルおよび10 μ U/mlとすると5例のクレチン症が発見されたが, 15 μ U/mlとすると4例しか発見できず1例は見逃されることになった。

以上の結果から TSH 測定によるスクリーニングのカットオフ値は第1回測定を3パーセントイルとし, 第2回目測定では3パーセントイルか10 μ U/mlとするのが適当と考える。

3. TSH-EIA によるクレチン症のマス・スクリーニング

成瀬らにより開発された TSH-EIA の基礎的検討を行った結果, 測定感度, 測定値の再現性, RIA との相関は良好であった。

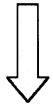
新生児18, 760例のスクリーニングを行った結果, 5例のクレチン症を発見した。これは RIA と完全に一致しており, EIA は RIA に匹敵するスクリーニング法であった。

東北地区のスクリーニング実施状況

東北大学医学部小児科 多田 啓也
館田 拓

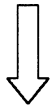
昭和56年1月より12月末までの東北地区のクレチン症マス・スクリーニング実施数は, 6県合計で136,484名であり, 10名のクレチン症が発見・治療されている。昨年度の報告をあわせると, 総数233,243名にスクリーニングを実施し, 内20名のクレチン症(1/11,700名)を発見している。測定法はおもに TSH の測定がおこなわれているが, 福島県では昭和56年1月より, TSH・T₄ 同時測定によるスクリーニングが実施されている。

各治療施設を受診した時の臨床症状を調査できたのは13例である。内6名は, 体重増加不良, 低体温などの症状を示していたが, 7名は無症状であった。又初診時甲状腺ホルモンの低下が認められたのは8名であり, 全例直ちに治療が開始されている。5名は初診時 TSH の著明な上昇を認めるもの



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 札幌市におけるクレチン症マス・スクリーニングの成績

1978年6月から1979年6月までにTSH測定により24,173例,1979年7月から1981年3月までにTSH,T4両者測定により37,134例,1981年4月から12月までにTSH,T4両者測定にTBG測定を加えて15,384例,合計76,691例のスクリーニングを行った結果,15例のクレチン症を発見した(発生頻度1/5,113)。

TSH,T4両者測定で発見された10例中6例はTSH高値,T4低値を示したが,4例はTSH高値,T4正常でありT4のみのスクリーニングでは見逃されていた症例であった。